



# 古代の 船着き場にて

4月17日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 4月17日のおはなし「古代の船着き場にて」

---

視線を感じて振り向いたが、そこには朝まだ早い観光地の、空虚なまでの沈黙があるばかりだった。

かつてここは港町だった。船着き場があり、積み荷を取り調べる税関吏が詰める建物があり、市場が立ち、町の権勢を示すモニュメントの門がそびえ、神殿や議場など石造りの頑丈な巨大建造物がいくつも建ち並び、そしていま、その全てが廃墟となって沙漠の中にある。海からは何キロも何十キロも隔てられ、ここがかつて港町だったなんて想像もつかない。

例えばいま目の前にある幅広の大階段は、海水の中につかっていたものらしい。潮の満ち干で海面の高さが変わると、階段の上の方まで水没することもあるし、逆に階段のほとんどが姿を見せることもある。小舟がその境界までやってきて積み荷を受け渡したり、時には船客をあげおろしたりした。2000年ほど前まではそんな風に使われ、ここは世界で見てもまれなほどの活気を呈していたのだ。この、いまは乾燥した砂礫だらけの無人の廃墟都市が。

彼らなら、とぼくは思う。かつての活況を見ることができるのだろうか。海岸線がここまであって（いまぼくが立っているところは完全に海の中だ！）、遠い土地の珍しい品々を積んだ船が、あるいは奴隷として連れてこられた異国の人々を積んだ船が入港を待ち、小舟が行き交い、人々でごった返していた当時の風景を。

いや、そうではないだろう。ぼくが見るように、あるいは当時の人々が見たようには、彼らには見えないに違いない。ちょうど蚤が見ている世界がぼくらに想像できないように。あまりにも小さな生き物がとらえている視覚情報は、ぼくらには小さすぎて意味を持たないようのだ。時間を超えた認識法を使う彼らには、ぼくらのとらえている情報などあまりにも——あまりにも遅すぎて意味を持たないのだろう。

彼らには紀元前にここに海岸線があって町が栄え、人や船やもので賑わっていたことと、21世紀のこの場所が沙漠で廃墟で、訪れる観光客も稀な土地になっていることには何の意味もない。それもこれもそれ以前の人類などいない時代も、もっと未来の人類が滅んだ後の時代も含めてその全体が、何かもっと違った形で認識されているのだろうし、その認識の中ではぼくの見ているものの価値などかけらもない。

不思議なことに、こう考えた瞬間にぼくは彼らを哀れだと感じた。明らかにぼくら人間の能力などはるかに凌駕した神のような存在である超越者たちを、どうしたわけか哀れだと感じた。ぼくは今、まだ人気のない遺跡にたたずみ、いにしえを思い、遙かな気持を味わうことができる。彼らにはそれは決して味わうことができない気持だ。なぜなら、彼らは過去も未来もなくすべて

の時空を同時に把握してしまうからだ。彼らは時に閉じ込められた不自由なぼくたちの、特別な感慨や感傷を創造しようとすることはできても本当に理解することは決してできない。

「理解しようとしているのよ」

「倉田さん？」

ぼくは混乱した。なぜここに彼女がいるのだ？ それから気づいた。これは夢だ。夢の中だ。そして何らかの方法で彼女はぼくの夢の中に侵入してきたのだ。

「ごめんなさい。こうするしかなかったの」

「ぼくの夢の中に入って来れるんだ」

「これはね。夢じゃないの」

「え？」

「禄郎さんの時間に干渉しているの。本当は禁じられているんだけど」

「ぼくの時間に干渉？」確かに倉田さんの姿は店でウェイトレスをしている時のままだった。およそ沙漠の遺跡に観光しに来る日本人の姿ではない。「どういう意味かわからないな」

「彼らは、理解するためにあなたたちを閉じ込めているの」

「閉じ込めている？」

「観察対象なのよ、あなたたち」

「観察？」

「そう。あなたたちは特にユニークだから」

「倉田さん、何を言ってるの？」

「説明している時間はないわ。不安定になってきた」

誰かが遠くで話している声が聞こえる。研究所？ 2人の男が声を合わせて言っている。そうだ。研究所だ。ぼくは研究所からあの場所へ。わたしたちが見ているのは夢ではない。もう一人の男が言う。

「覚えていて、わたしのこと」

そう言うと倉田さんの姿は消え、遺跡も沙漠も姿を現しはじめた観光客も何もかもが虹色に輝く光のネットワークに飲み込まれて行った。何度も味わったその感覚をぼくはずっと夢から覚める感覚だと思っていた。でも違うことに気づいた。これはぼくが研究所からここに来た時に味わったのと同じ感覚だ。そうだ。これは.....。

「そうだ。これは、夢ではない。」

(「ネットワーク」 ordered by こあ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 古代の船着き場にて

<http://p.booklog.jp/book/48288>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48288>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48288>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.